



TITLE:

遺稿と書信 (故中村要氏追悼號)

AUTHOR(S):

CITATION:

遺稿と書信 (故中村要氏追悼號). 天界 1932, 12(140): 437-447

ISSUE DATE:

1932-11-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/162291>

RIGHT:

遺稿と書信

【1】

寮生活（同志社中學）

私の寮生活の始りは大正五年の四月の十日である。入學式をすましてから兄の居る十寮へ入った。寮へ來ると寮長室へ行つた寮長から話があつて皆の住所姓名等を聞いた、聞くと一年級は六人で私と和歌山の中山君、神戸の森君、越後の伊藤君、朝鮮の三日月君、備後の桑田君である。兄と同室で二人である。勉強室は四疊位の小さい室で東向である。室が小さいので寢室を與へられた。それは六疊敷で西北の角である。ランプの光の下に居つた田舎者が其の夜から電燈の下で毎日勉強する事が出来るのでうれしかつた。其の夜はすぐ寢られた。翌朝は五時半頃に目が覺めた。會社のブーがやかましく鳴つて居た。寮の食堂へ初めて行つた。まもなく汁がぐばられた。御飯はいつも温い白いのであると聞いて居つたので口に入れるとあぢなくてたべられないので麥飯の方がよいと思つた。西寮から北寮の食堂まで約一丁半もあるので毎食かようのはいやな事だ。兄は學校へ行つたので同じ新入生と午後の二時から學校へ行つた。歸つてから寮長と御所の中を散歩した。始めて靴をはいたので足がいたかつた。毎晩輪讀會に出る事となつた。二三日すると臺灣人が二人來た。張陳の二人である。その爲に室を階段の下に變つた。夜寢る時階段の昇降がやかましかつた。始めての土曜の日に兄の級の人の主な世話で親睦會があつた。その前に雨が降つて居つたけれども嵐山へ

櫻見に行つた。多くの人が行つて居つた。嵐山電車で四條まで來てそれから市電で寮に歸つた。會席上では皆の自己紹介があつてから話や藝をやつた。私は田舎辯で話して笑はれてこまつた。一學期の中頃から新島先生の傳記を毎日讀まなければならぬのでいやだつた。五月の中頃ボートレースの辨當の引換券を渡された。當日辨當をもらつて見ると少し良かったけれども御飯はいつもの通りであつた。六月になつてから宇治へ遠足をした。烏丸通りを下つて七條へ出で深草の練兵場を通つて十二時だつたのでドンの鳴るのを聞いた。少し山手を廻つて辨當をたべた。いつもの通り牛肉のからだきとごぼうが入つて居た。皆といつしよに歩いて行つたが中途からおくれて管河君と一緒に居た。平等院のあたりをうろついて歸つた。電車で七條まで來て後は市内電車で歸つた。二學期になると寮へ歸つた。寮へ歸ると伊藤君が寮をやめて片岡君がかはりに來た。片岡君僕の組でよくあばれたのできもちよくなかつた。寮へ來てからもよくあばれた。次には知つて居るだけのあだなを書いて見る。

中山君 「おじようさん」

片岡君 「勘平六」

三日月君 「みかおつさん」

桑田君 「備後猿」 「ごんた」

森君 はなし

伊藤君 「ラムネ」

伊藤君はラムネを良く飲んだのでこんな名を付けられたのである。六月の終り頃に上鴨の池へ泳ぎに行つて歸り道にラムネの話が出て伊藤君が良くラムネを飲むといふ事からしてラムネと言ふあだなになつたのである。それについて面白い話がある。歸つてからのことであるが寮長が寮にあるラムネの瓶をとつてラムネののこりを football のつぶれた中へ入れて伊藤君の顔におしつけて泣かした事がある。後に伊藤君はしかへしに寮長の大事の鳥打帽の中に墨汁をつぎ込んで臺なしにしてしまつた。ところが山本君がそれを伊藤君の顔へおしつけて伊藤君の顔を眞黒にしてしまつた。

河口君 「lady」

榊原君 「Monkey」 「夜店」 夜店とは四ノ三生の名を夜店とよんだのである。

中村君 「monkey」 これは悪がしこいのです。

谷口君 「馬」 顔が長いからである。

西 君 「もつさり」 田舎風で田舎癖であるからもつさりと呼ばれたのである。

榊原君 「豆」 小さいからである。

まづこれ位である。二學期になつてから寮へ歸るとすぐ室制を見た。四年級の前野君と同室だ。私は前野君は恐い人だらうと思つて居ると同室になつて見ると少しもそんな事はない、前野君は良く勉強をした僕が早く寝るにもかゝらず十時の消燈後も勉強した。私の室の天井に張つてある紙が雨もりの爲絞が出来てゐてうすぼんやりとしてゐる。或晩目をさますと六寮の火の光がさしこんでゐる。ひよつと上を見ると天井の絞が大入道に見へて恐しかつた。よく思ひ返して見るとばからしくあつた。段々寒くなつてくると火鉢がほしいので室町へ

行つて買つて來た。丁度其日は十二月一日であつた。前野君は古い馬尻を短刀で切開いて火鉢の上にかぶせ下の火の熱で熱くなるようにして居つた。終に熱くなりすぎたのでこんな熱いのはいけないといつてやめた。三學期には三年級の井上君と同室だつた。二月になると五年級の喜多古内兩君及び寮長が神學部を卒業するのを送る送別親睦會があつた。一週ほど前に學校の大時計の前で寫眞をうつした。舞臺は集會室の半分へ疊を一枚上へ重ねて幕は昇降するようにしてあつた。皆芝居をやるのは上手だ。私の組でやつたのは喜劇であつた。私は夜廻りになつた。面白俱樂部にあつたのをやつたのだ。後の假裝行列には朝ねぼうして洋服を着て朝水をつかひに行く所をやつた二三次舞臺を廻つて返つた。その頃は朝早く起きる者は少くて大抵は朝七時頃におきて直行と言つて朝水をつかつてからすぐ食堂へ行つて學校へ行つたのであるからこんな事をやりました。少しおくれると御飯は食られないのです。三月から谷喜樂さんは寮長をやめてこの寮に居つた神學部の岸田君が來る事となつた、岸田君は神學部（生徒五十名）の唯一の特待生である。寮長になつてからの話でも谷寮長（同級生七名中の一番尻で今北海道へ行つて居る。）等とはちがつて話しは堂々たるものである。やる事は男らしい事をやつた、三學期が終つて二年級の一學期となつた。寮では一人も落第するものはなかつた。新入生は四人で一人は臺灣人で吳といふものである。

篠原君 「びりけん」 四人中一番丈が高く頭がとんがつて居る。生れは日向で大阪へ來この三月までは朝鮮の木浦に居つたものだそう

村上君 「出目金」 目の玉が出て居るか

らだ。生れは丹波である。

高橋君「ちび」丈が小さい生れは丹波の園部の牧師の子だそうな。

私の同室は榊原君であつた。初めての土曜に昨年と同じく嵐山へ行つて歸つてから親睦會があつた。私の新入した時に出會つた事をやつた皆おどされて面白かつた。新入の者を他の室へやつて居いて上級の者が椅子を二つならべ其の中をあけておいて毛布をかぶせ後でよんでうまく嘘して無理にこしかけさす。こしかけるものは椅子があると思つてこしかけると椅子に座つて居つた者がたつてこしかける者をひつくりかへすのである。會の終りに怪物の話があつた私は大變おそろしかつた。

岸田寮長の話

僕の生國は但馬であつて高等小學校の時に隣村へ擊劍の練習に行つて居つた。或日歸りに時間が十時頃になつた。丁度村界の所に墓があつて其の入口の所に白い物が居る。恐る恐る近よつて白い物を竹刀でたたくと紙がやぶれるような音がしたよく見ると葬式の時に用ふ紙がひつかけてあつたのである。

寮内の怪事

私の十寮に入る三年位前に起つた事である。四月の休暇に皆歸つて居つた。下の一室で寝て居つた者が朝早く目を覺すと床下の古井戸の中から犬の鳴聲が聞えるので朝起きてから井戸を見て見た。この古井戸は一丈許で水がない井戸である。ところが犬が一匹おちこんで居る。のこつて居る者がどうかして上ようと思つたけれども井戸の中へ入ると犬がかみつきしようが無いので石油を買つて来て犬の上にそいで新聞を落し新聞に火をつけてやき殺した。その時犬は死物狂になつて井戸を半分ほど飛上つ

た事があつたそうだ。後に犬を引上げて見るゝと實にむごたらしいものであつたと實見者は言つて居つた。今でもよく犬がおちこむのである。

又前野君が言つた事であるが三學期勉強して居ると十一時頃井戸の戸が上り下りするよりにキーキーの音がした、それから毎晩すると言つて居つた。親睦會後聞いて見るとたしかに音がして居る。それは寮のそばの風呂屋の煙突掃除の音であるそうな。榊原君と私は非常に仲わるかつた。榊原は私が下級生であるといふ弱味につけこんで私をいぢめた。私は初めからきもちよくなかつた所へ來たのであるからなほきもち悪くあつた。初めは僕を何とか批評する位であつたが私が早く寝ると起したりなんかしてゐたので或夜寝たふりをして居ると机の上から辭書をなげつけたので辭書を投げ返してやりたかつたし、どなつてやりたかつた。けれども自修時間だつたので辛抱して後から小言を言つてやつたら氣持の悪い顔をしてゐた。或時は電燈が消えてからふと人をまくりに来た又足でたたきつけたのでたたき返してやつた。或時は私が用事があつて押入れの中へ這入つて居ると突然開戸をしめてしまった。押合ひをやつて戸の板がやぶれるまで開かなかつた。こんな風で今でも仲が悪い。或夜九時半になつたから片岡君が来てつまらない話をして居ると前野君が来て少したつてから突然片岡をなぐつた。そして其の理由は前野君が片岡君をこのまない所へ昨日上級生の谷口君に生意氣な事を言つた爲だそうな。六月から岸田君が寮長をやめて岸田君がなつた。第二學期になつた。森君と同室だつた。私は森君を餘り悪い人間だとは思はなかつたけれども段々本性を現はして來た。親睦會の日

比叡山に遠足した所が森君一人同級生の野球試合があるから行かなければならぬと言つて行かなかつた。その上に遊んで晝は辨當と食堂とで二重食ひをし（食堂はこの二學期から寮營になつて居つたから食事はやかましかつた。そこで運動部長山本君と寮長とからにらまれた。翌夜二人で森君を起しに來た。森君はすぐ起きて行つた十分にしかられた上三ツ四ツなぐられた。是がはじまりである、それから一週間ほどたつと色々の野球道具を持つて來た。其後ほとんど毎日伊藤、藤田、柳川等の無頼の徒がやつて來る。來ると私の勉強をじやます。色々なものを買つて來て皮實等をちらけて出て行く。うるさくてこまる、終りに私と藤田と言合ひをしてから六寮で集つて居つた。或時はくりや紙墨汁等をとつて行つた。或日森が私に是非五十錢かしてくれと言つたのでかしてやると集めた金にたして野球用のミットを買つて來る。其の金も中々返さかつた。十一月の初に北寮の一寮に移つた。一寮は西寮の一寮をそのままの形で中をかへたのである。室は六つあつて二階建である。室は十二疊半位ではつきりわからない。六寮も北寮へ來た。二十四疊である六人制度である。久永總寮長は六人制度主張者である。寮も六人になるかもしれなかつたけれども岸田前寮長が努力して反對し遂には寮長をやめられたのである。九月の初めに出來上る豫定であつたが十一月の初めまでのびた。

一寮の建築は實にやすもんと言はなければならぬ。疊は古いのだし室の入口の戸は押入の戸の古いのをひ柱の古いのは板がはつてある。硝子障子も皆古だ。机は學校から作つてくれた。けあき製で本箱と兩方で九圓ほどかゝつたもので上等である。

私の室は下の中の五番室で一番暗い悪い室である。同室は四年級の山本君三年級の永井君と一年の篠原君である。十二月になると前に寮を出た前野君が又入つて來た。そして僕の室へ來た。篠原君は寮長室へ行つた。寮へ入つてからの事だが山本君は時々一時頃かへつて來る。聞くと悪い友と遊びに行くのだそう。山本君の家は兵庫縣の金持で一人子で月に四十圓から五十圓つかふそうだ。年はまだ十八歳である十二月前野君が入つて來るとすぐstart compaを開こうと言ひ出した。土曜日に夜食堂で牛肉を食つて室では菓子等をくつた。同時に室別が出來た。

第一條 自修時間中話す事嚴禁。話す時は罰金五錢也

第二條 ……屁を出したる者は罰金二錢也

第三條 自修時間中他人を入室せしめざる事及び外出三度に及ぶ時は罰金二錢也

そして外の所に自修時間中入室すべからずとはり出した。しばらくすると反則者が多く出來て來た。私も出した。十錢になると焼芋を買つて來て食つた。三學期になつた。上の三番室へ行つた。同室の人は二學期と同じである。朝は相變らずおそい。寮の者は大抵七時に起る。朝食は六時から食堂が開くのだけれども七時からのが多く行く。大抵直行する。前野君は此の學期から大變に勉強を始めた。高等學校に入る爲である夜はランプをともし一時までやり、起るのは四時である。私は一番下級生なのでよく買物にやらされた。前野君の爲に石油買に三日程おいていつも買ひにやらされた。室町に石油買ひに行く時はきつとマントの下にかくして行つた。見つけれらる

しかられる。芋買は長く行つた。門衛から十間ほど行けばある。カルタがよくはやつた。私は長く讀役になつた。篠原が一番だ。四人ほど片方になつても篠原一人で七十枚位はかたづける。次は廣田君だ。ほとんど毎日やつた。自修時間の終りから消燈までもやりとす。カルタがやめになるとランプをやつた。山本君が一番すきで一番上手だ。まける事はめつたにない。これも毎日やつた。寒いので二階の者は二階から小便をやる。私の室はやる場所がきまつて居つてくさかつた。私の室は各組の大將を集め下の六番室は弱みそばかりだ。室長の中村君は前野のきらいな人だ。よく下の室は私の室とけんくわした。七時半になると四人が一しよでドンとやつて知らん顔をして居る。又四人で一所に小便をするところと言つて居る。少し下でやかましく言ふと前野君は竹刀でたたきに行つた。

終りに中村君が寮長にうつたへた。所が中村君は公事にまけて泣寝入りだ。そのわけは中村君の室のものは二學期私の室の上に居た。その時よくあばれたので前野君は次の學期に上になつてもあばれてもかまはないかと言つた所が中村君がかまはないと言つた。それでまけたのだ。前野君と私の室の者は中村君を呼んで寮長が中に入つてだんばんした。所が前の事があるのでまけた。前野はその事をきかないと言つたらなぐるのだと言つて居つた。一月になつて二週ほどたつと月末にする卒業生送別の親睦會の芝居の練習をやつた。綴のと室のとをやらなければならぬのでいそがしかつた。練習中に起つた事であるが。

大時計の怪

丁度一月二十三日故新島先生の命日の夜十一時の鐘が鳴つた。同じ調子に十、二十と

なつて行く。初めは氣がつかかなかつたけれども皆が氣付いてさはいだ。實は二十五年前程の事であるが一人の學生がどうして入つたか知らないけれども入つて短刀で自殺した。其時鐘をつきつつ死んだ。初めは元氣よくなつて居つたが段段ほそくなつて聞へないよになつた。その時に學生は死んだ。その事を思へて再び起つたのであるまいかと考へた。或者は竹刀棒などを持って鐘つきの生徒をおこした所が時計の故障だろうと言つて居た所が鐘は二十分程たつてやんだので沙汰やみであつた。翌朝見ると二十一分の所でやんで居つた。二三日たつと井上君がいやだと言つて申々こなかつたので森君がなぐつてなぐりかへされ榊原君の仲さいでやめた。其夜練習やつて居ると突然電燈をけしてあばれてこまつた。其の親睦會の當日は食堂で beef をくつて一部會を終つて二部會にうつつた。寮長が家へ歸つたのでよほど面白くやれた。前野君がかんとくをした。十幾組芝居をした。私は二度も女になつた。着物は女學校へ行つて居る寮生の姉からかつて來た。エンサキから隣室のエンサキへ梯子を渡して通るようにした。僕の組でやつた時エンサキのサンがとれてひつくりかへつた。その爲着物はよごれた。終つたのは十二時を過ぎて二時半であつた。一人前二圓程とられた。此時岸田君の送別をやつた。其時の岸田君は堂々たる話で感心した。三年の一學期になつた。同室は五年の井上君と僕と二年の篠原と新入の一年の徳田である。新入の人は三人で

小林君 二年級 一年間獨學で勉強した
生れは岡山縣下だ。

徳田君 一年級 北海道の天鹽から來て
居るので熊といはれた。生れは

同じ

尾崎君 一年級 同じく北海道で生れは
富山。

前野君が出てからさつぱり墮落した。山本君と谷口君が出た。よく寝て居ると顔に墨をつけられる。試験の時は一番はげしかつた。其の爲私は夜は二時頃まで寝られなかつた事がある。皆が寝るまで寝られない。うつかり寝るとふとんを二階からほられる。墨をつけられる。赤インクをつけられる。髪を切られる等である。晝寝すると顔は眞黒である。私の室は室長が駄目なので一番はげしかつた。私の本箱には墨がつき「故中村要ボテ助の墓」とかかれ二階からほられて半つぶれだつた。行李もこわされた。解ボー道具がふんしつする。インク、墨汁がなくなる。石ケンがなくなる。椅子の足のつゝばりはバットでおられる。づいぶんひどい。赤インク等つけられると中々おち

ず學校へ赤い顔をして行かねばならない。試験の或夜實見すると十一時になり消燈するとそろそろいたづらを始める。ずつと一巡ローソクに火をつけて墨をつけて歩く。おきるとすぐローソクを消してにげる。押入の上はふとんがしけるので寢臺にして居るのを引きおとす。それがふとんをくくつてまどの外からつなでくくつておとす。下の者は手につなをつけられて二階から引かれる。ジャムを頭へぬられる。徳田なんかは墨をつけられジャムをつけられて起され顔をあらつて歸つて來て見ると机の上で寝て居つたつもりで寝るとひつくりかえされてとうとう起きてしまつた。徳田は翌夜は體をくくつて屋根の上で寝た。椅子の足をおられて五十錢も損した。一學期の終りの日は無茶であつた。ふとんも椅子もインクも墨汁もほられた。それでも仕様がな。こんな事で寮生活は非常にいやであつた。

【2】

拜啓

御手紙有難う御座いました。種々御通知の點有難う御座いました。

私も反射鏡を使ひ出してから六年になります。恐らく反射鏡に關しては自分は最もよく知つて居るかも知れません。現在英カルバ「十三吋」は全然自分の手に一任されて居ります。十三吋は古い器械ですが、器械の堅固な事は驚きます。又、星像にしても申分なく、あの鏡を修正し得る人は英エリソン氏以外にはないでせう。

自分も、随分以前から道樂仕事に鏡の製作に従事して居り、現在は可なり
の熟練を得、端の悪くなつたものゝ外、自分で自由に鏡面を修正し得る様になりました。數日前完成した「六吋」F 60吋のものは、全部手で十五時間計りで作りましたが、帶試験では

r	aberration
68mm.	0.00として

56mm.	+0.01
30mm.	+0.04
10mm.	+0.05

と出て居ります、一寸、自分でこれを行つた手続きだけを申しますと、球面からバラボラまで、68—10が1.49ミリになりますが、自分は英國の製作者の多年の経験に基いた實驗値 1.49×0.8 即ち1.19 ミリに近いものを與へるつもりだつたのです。出て來たのは1.30ミリ、前が0.11ミリ、焦點で0.03ミリで、自分の希望して居たものとなりました。此の程度まで完成するには、自分は、フーコー試験のみで鏡面の立體により、各帶に適當な作用を加へつゝ出來たものであります。

自分は、影試験の長い経験によつて、鏡面の判定は充分の自信をもつて居ります。

平面を作る事も汚ない道樂仕事の一つですが、表面がDの八分の一波長程度のものなら、作れますが、自己の試験平面板を持たないので、甚だ不自由に感じて居ります。余り高價なものでないのなれば、(會社で出來て居れば)、ほしいと思ひます。貧乏人ですから、急には参りませんが。

「十三吋」は、前にカセグレイン(カセニュートンとして)に使はれたらしく、筒の下部に接眼レンズの取付け部分と、それに必要なアイピースがありますが、カセ鏡やら其の他が一向無い爲に何であつたやら、見當が付き兼ねます。

四/五日あれば出来る事ですから、合成焦點距離10米程度のカセ鏡を作つて見たいと思ひます。如何なる表面でも、作れるだけの自信がありますから、作つた所で殆んど使ひ道の無い事です。

F5の鏡なら0.10ミリの収差は明瞭に現はれます。

「二十吋」はどの様な程度か存じませんが、「二十吋」が來たら入るべき大ドームでの経験によると、「十三吋」は正しい拋物線と帶試験では出るのに、事實星像は焦點内外完全に對稱的であるよりも、僅か双曲線になつて居る事の方が多くあります。其の程度は、(ハルトマン試験は行てゐませんが)眼視的にはほど(中央と端の差が)0.15ミリ位と思ひます。此れは全然溫度變化によつ

て出てくるものです。

全形の鏡では、温度が下降すれば（夕方のドーム夜中でも）僅かに双曲線の方に進みますが、穴のあるカセ鏡なら、反対の方になるとの事です。従つて「二十吋」に最後に與ふべき形としては、余程慎重の實驗を試みる必要があらうと思ひます。（「十三吋」は穴はありません。）

「二十吋」は、分光寫眞をやるのでなければ、長いカセ焦點は不必要なもので、純然たる寫眞用として（F五の焦點で）作つておきたいものです。そうでないと、使ひ途が少なくあります。「二十吋」になると案内望遠鏡で寫眞する等は不可能に近い事であります。眼視用として「十三吋」は京都では大き過ぎます。

御手許に記録はありませうが、故コンモン氏が「六十吋」のフィギュアリングで最後に得た値をお目にかけます。F5.7の鏡です。

r	5.01 inch	+0.06 mm
	8.19	-0.02
	11.60	-0.03
	14.46	-0.27
	16.02	-0.03
	18.05	-0.01
	19.58	±0.00
	20.58	+0.18
	21.95	+0.07
	23.38	-0.08
	24.68	0.00
	25.94	+0.15
	27.80	-0.04
	28.80	0.00
Maximum aberration =		$\frac{1}{34000}$ F

此れで、コンモンは帶テストで完成し、種々の觀測には使つて居たのですが、ハーヴァード天文臺に寄附されてから、像が不充分なので、使はれては居りません。

山本先生の御話では、鏡を檢査する爲めに、私も同行する事になるでせう。

種々勝手な事ばかり書き立てましてすみません、何か御参考になれば幸ですが。 早々 要

五 藤 様

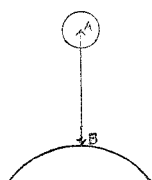
【3】

○ ○ 様

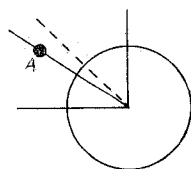
前略 (1) マウンティングが一番良いといふ型はありませんですから、各自の都合に應じて最も良さそうなものを選ばねばなりませんでせう。御書きのものでは筒が重ければ上下の運動が可なり困難になりませうから廻轉面を強く大きくしておいて下さい。

(2) ファインダーは何でもよろしいでせうが、十字線は對物レンズの前にはつては見えません。接眼レンズを外して接眼レンズの焦點におかねばなりません。プリズム双眼鏡は一般に分解する事は困難ですからどうしたものでせうか。高さは甲圖 AB の距離と了解しておいて下さい。ファインダーは右眼のきく人なら乙圖 A のあたりが良いでせう。上はいけません。御自分で研究して下さい。

(3) 筒は眞すぐでもレンズが此れと直角について居る事は必ずしもきまりません。光軸修正は良い結果を収めるには必要ですが、若し方法が分からねば出来るだけ直角につける事を心掛けなさいませ。



甲 (2)



乙 (2)

(4) 露除けは太くなくてもよろしいです。レンズの先にさへ居ればよろしいです。レンズは取外す必要は全くありません。蓋さへつけておけば充分です。

(5) 對物レンズは普通の場合筆だけで宜しいです。レンズに就ては余り氣にかける必要はありません。絶えず使つて居れば事故は反つて少いものです。

(6) サングラスは二吋では割れる事はありません。あつても極く稀であります。三吋では 50 倍位なら 2—30 分も使へば割れる事は度々あります。80 倍になれば割れる事は反つて少ないですが、硝子 (墨) が一部分とけて盛上つて來ます。一般に毎日使ふなれば三吋では割れる機會はありがちです。太陽ダイアゴナルは五藤では 25 圓の定價であります。簡単な實用向きのものなら 10 圓までゞ作れるはずでありますから、若し御希望なら御知らせ下さい。費用は出来上つてから實費で頂きます。

中 村 要

【4】

(昭和四年九月二十五日發、この夏兄腸チブスにて死去)

庸夫兄

拜啓御丁寧な御便りを頂きまして有難うございました。小生の拙著は南洋旅行中〇の方にたのんで校正をしてもらひました爲に誤植が多くてはづかしい次第です。昨年十二月から一月中旬まで冬休みの仕事に書きましたが、内容を見て頂けば分かりませうが、編輯其他寫眞まで大分念を入れて風變りな事をやりました。

兄の不幸も突然な思ひがけない事であり、一人の兄を失つた事で一時は途方にくれましたが、近頃どうやら思案がついて、當面の處置を曲りなりに考へつきました。〇〇の教育も小生一人では難問題ですが、もう三年ですから小生さへ健康なれば、どうにかなるだらうと思ひます。

未だ兄が又歸つて来るやうな事もふと念頭に浮びます。又、反面には數年後には福運が舞ひ込んでくる様にも思ひます。小生は時々、自分自身の將來について、又肉身のものの中に、不思議な豫感を受ける事があります。今度の兄の死去もどうした譯か今から考へれば豫感らしいことがありました。正氣でなさそうな事も書きまして、すみませんが、同志社在學中に受けた一つの道徳的教育と、軍隊生活から、人生問題について自分の悟りとでも申しませうか、度胸を持つて居ります。

終りに臨んで貴君の御養生を御願ひ申します。

中 村 要

花山天文臺は清水山の裏に當る所で、山科からよく見えますが、海拔221米の平な山頂で、日岡峠から約半里もあります。今定住のものは三人であります。水が不自由なのと食料の買込みにこまります。然し世間離れて静かな事と、生活費が普通の半分ですむので幸です。山科町や京都北部の夜景は實に美しいもので、生駒山や大阪市の煙突も見えます。

【5】

(昭和六年九月十五日發、この九月三日「望遠鏡の作り方」についての講演をラジオ放送)

庸夫兄

拜啓先日は御便り有難うございました。數日急がしい日を送つてやつと暇になりました。

放送室は十五坪位ありませうか、すつかり防音設備の出來た室で、室の中間にテーブルと、其の前にマイクロホンがかかつて居るので、室に居る人はアナウンサー一人で、一向妙な感じがします。暑い時ですから放送者のうしろに氷柱が立ててあつて、割合に涼しかつたです。

眼前に時計を置いて時間ばかりを氣にして一人で話しをします（小生はいつも原稿は作りません）ので途中で日本全國で聞いて居ると思ふと變な氣がします。

六時零分零秒に JOBK とアナウンスして、零分二十秒から題目のアナウンスがあつて、あとは任意に六時二十九分に終る様に話しをするので、甚だたよりのない氣がします。京都の演奏所は〇〇といふアナウンサー一人ですが、其の人から今度の放送をたのまれました。行き歸りは先方の自動車で、放送料は三十分で〇〇圓がきまりの様です。放送局では仲々時間がやかましい様です。

涼しくなつたら一度伺ひます。 早々

要

天界第140號（故中村要氏紀念號）出版費寄附金〔其二〕

氏 名	金 額
中 村 進氏	1.00
原 田 參太郎氏	5.00
鐵 石 生氏	1.00
大 角 留吉氏	1.00
原 田 東 岷氏	1.00
進 藤 四 朗氏	1.00
渡 邊 恒 夫氏	1.50
安 原 久 美氏	1.00
橋 詰 直 明氏	.80
清 水 眞 一氏	2.00
北 村 重 雄氏	1.00
大 崎 孝 次郎氏	.50
北 川 由 郎氏	3.00
水 谷 秀 三郎氏	1.00
西 田 太 二郎氏	2.00

氏 名	金 額
石 野 經 一氏	2.00
小 林 正 久氏	2.00
諏 訪 莊 一氏	1.00
阿 部 健 治氏	1.00
音 川 滋氏	1.00
内 田 民 子氏	2.00
大 場 春 江氏	2.00
稻 垣 武 五氏	2.00
勝 修 三氏	2.00
牧 田 益 男氏	.50
高 崎 毅氏	.50
小 計	38.80